

2017年度タイ&シンガポール研修報告

先川 信一郎*

(受領日：2018年5月7日)

高知工科大学国際交流センター
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

* E-mail: sakikawa-shinichiro@kochi-tech.ac.jp

要約：本学のグローバル戦略の一環である2017年度のタイ・シンガポール研修が、2018年3月4日から14日までの日程で行われた。高知工科大学（KUT）の学部生20人（男子8人、女子12人。4、3、2年生各1人、1年17人）が参加し、タイでは泰日工業大学（TNI）、キングモンクット工科大学ラッカバン（KMITL）、シンガポールでは、シンガポール科学技術研究庁（A*STAR）や南洋理工大学（NTU）、インキュベーター方式の企業を訪問した。とりわけ、KMITLで行ったPBL（Project Based Learning=課題解決型学習）は、今回の研修のハイライトであり、学生たちは同世代のタイの学生たちと課題を設定し、チームで解決策に取り組み、異なる考え方や価値観をぶつけ合ったことで、コミュニケーション能力を向上させたといえよう。

1. はじめに

グローバル人材の資質の重要なファクターの一つに「異文化リテラシー」がある。要は、違う国の歴史や価値観を理解した上で、いかに自分の考えを伝え、どう行動するか—ということだ。

本学には、イリノイ州英語研修、バンクーバー英語研修、YOSAKOIサマースクールなどの海外プログラムがあるが、タイ・シンガポール研修は、英語がそれほど得意ではない学生たちを対象とした“初心者向け”のプログラムとして、2012年度以来、毎年3月に実施してきた。

主な目的は①海外の学生と交流し、アジア諸国の活力を目のあたりにし、帰国後の学習に対するモチベーションを高める②異文化に触れることで、国際的見識を高める③英語によるコミュニケーション能力を向上させることである。

ただ、高校まで「受け身」の学習に慣れてきた学生たちが、PBLや日本文化紹介で積極性を発揮するには、少し背中を後押すことが必要だった。このため、事前研修を2017年12月から出発直前まで、計9回実施した。また、英会話に慣れるため、全員が“Listening/Speaking”の集中講義を履修、または聴講し、TOEIC-IPを全員が受験して英語力アップを目指した。



図1. 泰日工業大学でいよいよ研修がスタートした

事前研修は、英語による自己紹介や日本、高知、KUTに関するプレゼンテーション、YOSAKOI、折り紙、着物などの日本文化紹介のパフォーマンスの練習、さらに海外で行動する際に必要な危機管理について備えるよう徹底した。

研修を通じ、学生たちはアジアの若者のエネルギーに刺激を受け、自由な創造性と大らかさを学び、自分たちがグローバル化のうねりの真ただ中にいることを実感したのではないだろうか。

以下は学生たちの報告・感想である。（学年・所属は研修実施時）

【研修参加者】

此尾 友花	システム工学群 1 年
柴崎 友里	環境理工学群 1 年
滝野 結公	システム工学群 1 年
北村 真由子	システム工学群 1 年
安岡 侑夏	環境理工学群 1 年
川見 稜	システム工学群 1 年
野上 知恵	システム工学群 1 年
田邊 香貴	経済・マネジメント学群 1 年
星田 岬	経済・マネジメント学群 1 年
入江 康平	システム工学群 1 年
八木原 綾音	経済・マネジメント学群 1 年
青景 壮真	システム工学群 2 年
岡林 弘務	環境理工学群 1 年
鎌倉 康哉	環境理工学群 1 年
井上 舜也	情報学群 4 年
上村 大輔	システム工学群 3 年
小松 眞子	情報学群 1 年
中村 優	経済・マネジメント学群 1 年
楠瀬 青衣	経済・マネジメント学群 1 年
田口 陽太	システム工学群 1 年

2. 友情は微笑みから

◇システム工学群 1 年 此尾 友花

午前 8 時 45 分にホテルのロビーに集合した。皆、緊張と不安、興奮が混じった表情をしていた。TNI まではバスで移動したが、バス内では、6 時間のフライトの疲れで寝ていた学生や、TNI で行うプレゼンの練習をしていた学生がいた。

午前 10 時ごろ、ようやく TNI に到着した。2 人の学生が出迎えてくれ、教室まで連れて行ってくれた。教室に入ると、多くの学生が着席して待っていた。私たちが着席すると、TNI の学生が MC 役として、挨拶をした。TNI 職員の児崎大介さんが、自己紹介の後、TNI に関する基本情報の動画を見せてくれた。その動画を見る前に、児崎さんが「この動画を見た後に皆さんにクイズを出すのでしっかり見ていてください」と言ったこともあって、私たちは、集中して動画を見ていた。児崎さんから出されたクイズは、TNI の学部や生徒数など、動画で紹介されていた情報だったので、皆しっかりと正解する事が出来た。

次は、TNI 講師の池田隆先生によるタイの歴史や日本との関係に関する講義だった。そこでは、タイの歴史やタイ語、タイのお土産、タイ料理などについて紹介してくれた。池田先生は、辛い食べ物が苦

手ということで、そんな人でも食べられるタイ料理なども教えてくれた。ほとんどの学生はタイ訪問が初めてだったので、非常に参考になった。

昼ごろ、楽しみにしていたバディとの顔合わせがあった。KUT 学生一人一人の名前が MC の学生によって呼ばれ、TNI のバディと初対面した。教室の前で自己紹介をした後、バディとともにランチを食べた。バイキング形式で、カレーやチキン、タイ米、フルーツなどの料理が沢山あった。TNI の学生たちは積極的に話しかけてくれ、楽しく食事をする事ができた。

【感想】

今回の研修での一番の収穫は、自分の英語力を実感できたことだ。私はこの研修に行く前まで、タイの学生と対等に話せて議論できるかどうか、心配だった。それは自分の英語力のなさ、自信のなさから来ていることは分かっていた。

しかし、実際に行ってみると、自分が感じていたよりも、英語で会話することができた。このことは、少し自信に繋がったと思う。そうはいっても、タイの学生の英語力、会話力に助けられたことも多い。中には、英語はできないけれど、とても親切にしてくれた人がいた。英語での会話はできなくても、心が通じれば、仲良くなれると実感した。

KMITL では、学生の英語の発音や話し方がとても綺麗だったため、見習いたいと感じた。また南洋理工大学 (NTU) では、英語、日本語、中国語と 3 カ国語を話すことができる学生が大勢いて、刺激的だった。英語で自分の考えを述べ、相手の意見を聞いて「話せる」ことの楽しさを知った。これからもたくさんの人や、人種、性別の関係なく話を聞いて、多くのことに挑戦したいと思った。

昨年の夏、TNI の短期プログラムで TNI を訪れ、タイが大好きになった。今回の研修も、タイ料理をたくさん食べ、タイ人と話し、多くを感じた 7 日間だった。もっとタイの多彩な文化や芸術、例えば寺院などに行って歴史を学び、新しいことを知りたいと思った。

一方でシンガポールは、ある面では日本よりも発展していた。人種はバラバラだったが、それでも小さな国の中で文化の違う人が混ざって住んでいる様子を直接知ることが出来た。

この研修で TNI、KMITL、チュラロンコン大学、NTU の 4 つの大学に訪問し、留学したいという気持ちが一層強まった。

これからの大学生活で、私が頑張りたいことは、

【タイ・シンガポール海外研修日程】

3月4日(日)	午前：高知発、バンコクへ
3月5日(月)	終日：泰日工業大学(TNI)訪問(講演、研究室見学、学生交流)
3月6日(火)	文化史跡等見学
3月7日(水)	午前：キング・モンクット工科大学ラッカバン(KMITL)訪問へ移動 午後：KMITL訪問(開会セレモニー、学生交流、アイスブレイキング)
3月8日(木)	KMITL訪問(Project Based Learning)
3月9日(金)	KMITL訪問(Project Based Learning)
3月10日(土)	Project Based Learning 発表会
3月11日(日)	シンガポールへ移動
3月12日(月)	午前：シンガポール科学技術研究庁(A*STAR)見学、講演 午後：グループにわかれて南洋理工大学(NTU)、ビジネスインキュベーターを見学
3月13日(火)	日中：自由研修、夜：シンガポール発、日本へ
3月14日(水)	午前：高知着

まず今よりも英語を勉強することである。もっと会話で使えるボキャブラリーを増やしたいと思う。具体的には、TOEFLで80点以上のスコアを取ることが目標の1つである。

そして、2つ目にKUTにいる留学生はもちろん、日本人にも積極的に声をかけて、色々な人と話することだ。タイ人やシンガポールの人たちが親切にしてくれたように、私も多くの人に接する事で会話を高め、その人たちの話を自分の人生の糧にしたいと思う。

◇環境理工学群1年 柴崎 友里

バディとの顔合わせの後、すぐにウェルカムランチが始まった。ビュッフェ形式で、5種類程の料理とジュースが用意されていた。各々のグループが空いている席に座り、談笑しながら昼食を食べた。料理は日本人向けに作られていたのか辛いものはなく、食べやすかった。

TNIは、日本語が必修科目であり、プログラムに参加しているほとんどの学生は、日本語で不自由なく会話できた。あるグループは、タイ人学生がまだ1年生で上手に日本語が話せなかったため、英語で会話していた。お互い似たような英語レベルであったため、不自由なく会話を続けることが出来た。昼食は30分ほどで終わったが、日本人学生もタイ人学生も、さらに多くのことを話したそうだった。

この後、2つのグループで機械系と自動車系の研究室を見学した。機械系の研究室は昼食を食べた同じ校舎にあった。ベルトコンベアに乗った金属の部品をセンサーで感知し、吸引力を用いて別のベルトコンベアに乗せる作業を見た。研究室の外にあっ

たモニターで普段の講義の様子や見学の様子が映し出されると、タイ人学生が日本語で説明してくれた。

少し離れた建物にあった自動車系の研究室では、ガソリンで動くタイプのレーシングカーと、電気で動くタイプが展示され、タイ人学生が、英語で説明してくれた。レーシングカーに乗って記念撮影してもいいと言うので、私たちの何人かはレーシングカーの乗り込み、記念撮影をした。研究室見学が終わった後も、システム工学群の日本人学生が熱心に質問をしていた。タイ人学生の対応は丁寧で、この後行われたタイ文化体験より前に親しく交流することが出来た。

【感想】

今回の研修を通して、自分にもっと必要だと痛感したのは、コミュニケーション能力、英語力だった。コミュニケーション能力に関しては、TNI、KMITLに訪問している際に特に感じた。TNIは1日だけの訪問で、その日の夜にバディと晩御飯を食べ、門限前に解散した。たった1日だったので、仲良くなれなくても仕方ないと思っていた。だが、ほかのバディを見ていると、次の日にタイ人学生がホテルのロビーまで来てくれたり、別日の自由行動の日にもう一度遊んだり、空港まで見送ってくれる学生もいた。

また、KMITLでは、多くの日本人学生がPBLのチームメンバーとは違うタイ人のメンバーに、積極的に話しかけているのをうらやましく思った。英語力に関しては、サマースクール以降、ランチアワーやインターナショナルハウスに住む日本人学生主催

のホームパーティーなどに参加し、自分の中では会話力が上達していると思っていた。しかし、そう感じていたのは、留学生が日本人と話すのに慣れているからであり、自分の上達のおかげではなかった。タイでは思っていることを話しても、すぐに理解してくれることはなく、PBLでは日常会話で使わない単語や文法を使うので苦労した。

とにかく、タイ人のチームメイトの訛った英語を理解するのは大変であった。コミュニケーション能力については、日本人相手でも苦手なので、まず先に英語力を鍛えようと感じた。PBLが始まる前は、丸2日間も部屋にこもって話し合うのは無理だと思っていた。だが、タイ人メンバーが私の英語を理解しようと一生懸命に聞いてくれたり、こうしたらどうか、とアドバイスをくれたりしたことに助けられた。日本人メンバーもいち早く自分の言いたいことを理解してくれた。「こうしたら伝わるのではないか」と一緒に考えてくれ、自分では思いつかなかったアイデアをタイミングよく発言してくれた。何よりチームメイトが私の意見を否定しなかったので、とても楽しく過ごすことが出来た。

別のチームでは、誕生日の人がいたらサプライズを企画して祝ったり、昼過ぎになると昼寝が始まったり、ギターで弾き語りをしながらプレゼンを考えているメンバーがいて、とても自由で陽気な雰囲気だった。私たちのチームの結果は銅メダルで悔しかったが、もっと頑張ろうと思った。

◇システム工学群1年 滝野 結公

研究室見学では、TNIの研究室とサークルを訪問した。人数の都合上、グループに分かれてTNIの学生に案内されて回った。一つめの研究室はAdvanced Industrial Engineering & Technology (AIE&T)。この研究室の教授は産業用ロボットを研究しており、学部3年生の授業を受け持っていた。産業用ロボットの授業は大きく分類して自動車系とIoT系に分かれていた。ものづくり系の授業では、企業見学、モノのデザインの講義も担当していた。

モノのデザインとは、例えば車のミラーの分解研究から始まり、最終的に模型を仕上げたり、おもちゃのデザインを設計したりする。ただ美しいものを作るという発想ではなく、デザインするモノに必要な構造を理解し、無駄をそぎ落とし、製品として作りやすい構造にするなど、理論的に正しいデザインを求めている。

次にCarrera Zというフォーミュラサークルを訪問した。1年間かけてカーボンや金属をシート状から



図2. ウェルカムランチで初めてのタイ料理を味わう

加工してレーシングカーを作り上げ、国内国外問わずレースに出場していた。ガソリン燃料で走るエンジンを搭載した車体と、水素燃料による電気モーターを搭載した車体の2種類があった。最高速度はそれぞれ120 km/hと80 km/hで、実用に値するレベルの完成度であった。

特別講義はFormula SAEに関するものだった。同サークルがどんな活動をしているか、世界各地のフォーミュラ、それを通して学べることなどについての解説だった。ドーン教授によれば、フォーミュラを通して数学、デザイン、製造業、製品試験、発展過程、マーケティング、経営、資金集めと多岐にわたる学びを得ることができるという。プログラミングも、コンピュータエンジニアリングも、CADも多くの専門知識が問われ、様々な学部の人が集まって、1台のレーシングカーを作り上げていた。

この後、タイ文化体験ではタイダンス、タイボクシング（ムエタイ）、タイ楽器の3グループに分かれ、伝統文化を学んだ。タイダンスは、衣装の種類や着用方法を学んだ後、最も簡単な振り付けを教わった。タイボクシングは、基本的な動きからペアを組み、より実践に近い動きを学んでいた。タイ楽器は、演奏を聴いた後、一人が一つの楽器を担当し、各パートをじっくりと教わった。各グループは45分ほど練習し、最後に皆の前で発表した

【感想】

今回のタイ・シンガポール研修は、私の思っていた以上に勉強尽くしだったが、その一方で楽しく、とてもためになった。私にとっては2度目の海外旅行だったが、入国審査など基本事項ですらわからないことが多く、行く前は楽しみより不安な気持ちでいっぱいだった。行ってからは不安がなくなり存分に楽しみました、と言いたいところだが、実際の私

は行ってからも不安だった。

不安の原因は、英会話のスキルだった。前回海外に行った時には通訳の方がいて、リスニングと日常の意思疎通さえできれば、何ら支障はなかった。しかし、今回の研修（特にメインのPBL）では、学術的、論理的な英会話が求められたからだ。

最初に訪問したTNIは、日本語を話せるバディが日本語で話しかけてくれたので、まったく問題なく過ごせた。タイダンスや放課後を通してタイの文化に触れることができ、研究室見学を通して海外でも日本と同じような研究が行われていることを学んだ。

翌日は、王宮と寺院を見学したが、予習不足で訳もわからず眺めて終わった。もちろんガイドさんの話で多少の知識は得られたが、もったいないことをしたなという気持ちがあった。しかし、私がもっとももったいないと思ったのは、PBLの2日目だった。風邪をひいたと思って休み、みんなに迷惑をかけた。

PBLは、予想通り難しい内容だった。チームメイトの意見を改善して磨き上げたいのに、自分の意見がさっぱり言えなかった。とてもとても大変だったが、私はPBLを通して学問に対する考え方を見直さなければならないと、切実に思った。

英語が出来ない私にとって、英語ができることのメリットよりも、英語ができないことによるデメリットを感じるのが悔しく、自分を奮い立たせてくれるいい経験となった。自分の意見は、英語ができないから言えなかったわけではなく、そもそも思いつくこともままならなかったのだ。私はもっと能動的に学ぶということを意識して行なっていくべきだと思った。

シンガポールに移動した後は、ただひたすらに多民族社会と高度な研究状況に唖然とした。こんなにいろいろな人種が互いに意見を交わしながら高め合い、共存しているのかと素直に驚いた。しかし、私の中ではあまり国としての印象は残っていない。どうしても無機質な部分が多いと感じた。研修は10日間だったが、私たちの中に多くの変化を生み出したと思う。ただ、変化を遂げたのではなく、まだ生み出した段階だ。私はこれからの生活で、良い変化を遂げるべく走っていこうと思う。

3. ものづくりに学ぶ

◇システム工学群1年 北村 真由子

TNIを訪問した3月5日の午後、研究室見学の後は工学部のドーン教授によるフォーミュラについての特別講義を受けた。タイは自動車産業が盛んであ



図3. タイの打楽器の演奏を習う KUT 生

り、TNIにも自動車工学のコースがある。そこでは学生によるフォーミュラの製作が行われており、世界各国の様々な大会にエントリーしていた。

フォーミュラのほぼ全ての部品を学生自身で作り、乗り心地や動作を確認する。工学的なスキルはもちろん、専門分野の異なる約30人の学生たちのチームワークが求められる作業だ。実際にドーン教授は、「フォーミュラの製作において最も大切なことはチームワークである」と語っていた。

また、日本での就職が可能であるTNIの学生にとって、フォーミュラの製作で培った技術と経験は、就職活動で有利になるに違いない。タイの自動車工学は日本から取り入れたものであり、まだまだそのレベルは日本に及ばないそう。実際に過去のフォーミュラの大会の上位入賞校には、日本の大学の名前が多く見られた。しかし、タイの自動車産業が日本から技術を学び、熱心な若い人々が実践していく中で、日本に肩を並べて競い合う日はそう遠くないかもしれない。まさに工学系の大学にふさわしい英語による講義内容であった。

特別講義の後はTNIの学生によるタイの伝統的な楽器の演奏を聴き、タイ楽器、タイダンス、ムエタイの3つのグループで、それぞれ文化体験を行った。30分ほどの練習時間があり、その後全員の前で披露した。タイ楽器のグループは7人で、日本では見ない鉄琴や太鼓によく似た楽器を演奏していた。

タイダンスのグループは、まず衣装を着付けてもらった。男女とも布を体に巻き付けてピンで留める衣装であった。女子は衣装に加えてネックレス、髪飾り、ベルトといった装飾品を身につけた。振り付けを教えてもらい、音楽に乗って輪になって踊った。ムエタイでは、八木原さんが飛び抜けた才能を見せた。左腰あたりにかまえたミットに爽快な音と

共に蹴りを入れると、周りから歓声が上がった。

5日の最後には、KUT 学生による日本、高知、KUT それぞれについてのプレゼンテーションとパフォーマンスが行われた。何カ月も前から原稿やパワーポイントを作成し、事前研修で修正してきたプレゼンを初めて披露するため、やや緊張がみられた。しかし、浴衣を着た日本グループの川見さんが笑顔で発表を始めると、会場は楽しい雰囲気に一変した。

この間、TNI の学生たちは、質問を投げかけると次々に答えた。TNI の学生たちは日本のアニメーションについてはよく知っていて、「このアニメーションを知っていますか」という問いにはたくさんの「イエス」が聞こえた。また、彼らは日本や高知の自然の写真に見入っており、日本の自然の美しさに興味がある様子だった。こうしているうちに、みな笑顔で楽しむことができた。

最後のパフォーマンスでは、よさこいを披露した。折り紙やけん玉、お手玉、だるま落としなど、日本の伝統的な遊びをいくつかのブースに分かれて紹介する予定だったが、3つのプレゼンが長くなってしまい、十分に紹介することができなかったのが心残りだ。

TNI でのスケジュールは、副リーダーの上村さんのあいさつで締めくくった。たった1日の TNI との交流ではあったが、Facebook や LINE で友達になることができ、その後も連絡を取り合っている学生たちもいた。これは、KUT と TNI 双方の学生にとって忘れられない思い出になった。

【感想】

タイ・シンガポール研修に参加するにあたり、海外の生活や文化に興味があったため、私は日本ではできない経験をしよう、日本とは異なる人々の暮らしを見てこよう、と考えていた。新しい建物と古い建物の混ざったバンコクは、一見栄えた大都市に見えても、振り向けばスラム街があり、街を歩けばホームレスが道路に座り込んでいた。道路はガタガタで舗装されていない所もあった。

とてつもない数の車と渋滞、窓ガラスのないバス、猛スピードで走るトゥクトゥクといった道路での体験は、日本ではできないだろう。電車の切符はカードのほかに IC チップがあった。コンビニのファミリーマートは、日本と同じ緑基調の店に加え、黒基調の店があった。お寺のワット・ポーやエメラルド寺院は、日本のそれとは色使いも装飾の量も全く異なっていた。

初めて食べたタイ料理は、自分でも驚くくらい



図4. タイの伝統舞踊を優雅に踊って大喜び

口に合っていた。その中でも想像を絶する辛さの料理は、涙を流しながら食べた。さらに、座る時は椅子を引いてくれる、かばんは何も言わずに持ってくれる、異国の人間である私にバスの席を譲ってくれる、といったタイの人の優しさを常に感じていた。

いつも笑顔でおおらかなタイの人々の性格は魅力的だった。マーケットでは、売り物は何でもありで、見ているだけでも楽しかった。PBL では意思の疎通に苦労したが、グループで1つの問題について新たな解決策を見つけるまでとことん掘り下げるとい、今までにやったことのない議論はためになった。タイでは本当に今までにない経験ばかりで、毎日が発見と感動の連続だった。

シンガポールはタイとは異なり、道やホテルはとても綺麗で高層ビルが立ち並び、どちらかと言うと日本のような国だった。すれ違う人全員が違う民族の顔つきをして違う言語を話しており、これぞ多民族国家という雰囲気を感じた。

振り返ってみれば、A*STAR での講義で聞いた「1つの言語を習得できれば扉が開く」というフレーズが、私のお気に入りだ。私にとって初めての英語を公用語としている国の訪問だったが、シンガポールが発展できたのは英語を公用語としたからだと言われるように、これから先の人生、さらなる英語力の向上が必須だ、とあらためて感じた。

井上雅文教授から、「英語力の向上・TOEIC のスコアアップに効果的なのは、声に出して英語を読み、自分の英語を聞くこと、語彙を増やすこと、日々努力を積み重ねること」だと教えていただいた。これはぜひ実践していきたい。

タイとシンガポールを初めて体験し、もっといろいろな国に行ってみたいという気持ちが強くなった。今は英語が公用語の国に行ってみたいと考えて

いる。住んでいる環境や文化が違ってても、英語が話すことができれば世界の人と友達になれる。英語でもっともっとたくさんの人と話してみたい、いろいろな景色を見てみたい、そこでしかできない経験をしたい、というのが今の気持ちだ。

家族や友達には、海外なんて危ないのではないかと、と言われることが多いが、海外で現地の人と喋ったり観光をしたりするたびに、小さな日本という国に留まっているのはもったいないと感じている。また、シンガポールの井上教授の話を聞いて、海外大学への留学についても真剣に考えてみようと思った。人生一度きり。まして大学生活のように、好きなことができる時間はそうないだろう。タイ・シンガポール研修で学んだことを忘れず、大学生活を悔いなく過ごす原動力にしていきたい。

◇環境理工学群2年 安岡 侑夏

研修2日目、私たちはTNIを訪れた。この研修で初めてのバディがついての活動が始まった。TNIの学生たちは日本語での簡単な会話ができ、積極的に日本語で話しかけてきた。日本語で日本人と交流したいという思いが感じられた。それに対し、私たちは仲良く会話を弾ませたいが、コミュニケーションをどう取ればよいのか、どんなことを話せばいいのか、わからないことが多く、最初は戸惑った。

バディに連れられ、ウェルカムランチが始まった。バイキング形式で、TNIの学生がそれぞれのバディであるKUTの学生に、料理に使われている具材や、辛い、甘いなどの味の説明をしていた。昼食をとりながら、「日本料理では何が好き」「日本語は難しい」などの質問をお互いに投げかけて会話を進めていった。ウェルカムランチの間はお互いの様子を探りながらの会話となった。

昼食後は研究室見学が行われた。研究室の説明は英語だったが、それをTNIの学生は私たちに日本語で説明してくれた。質疑応答の時間になると、自由な会話が始まった。気候の話題、学校生活の話題など、タイと日本の違い、共通点を探して盛り上がった。会話を通してお互いの好きなものを分かり合うことができた。

タイの文化体験では、嬉しさや好奇心の中で楽しく練習に取り組んだ。慣れないKUTの学生に対して、TNIの学生たちは笑顔で優しく教えていた。「いつこのような楽器、ダンス、スポーツを楽しんでいるのか」「どのくらいタイ人に馴染みあるものなのか」などの質問にすべて答えてくれた。練習するうちに上達するKUTの学生を見て、TNIの学生



図5. 文化交流では、よさこ鳴子踊りを披露した

たちも同じように喜んでくれた。お披露目の時間になると、TNIの学生たちはとても楽しみにしている様子だった。私たちが一生懸命パフォーマンスを終えると、自分のことのように喜び、褒めてくれた。

夕方から、TNIの学生たちは私たちを夕食と買い物に連れ出してくれた。食べたいもの、買いたいものを言えば、お薦めの場所や安いお店を紹介してくれた。この頃にはみな打ち解け、和やかな会話が続いた。KUTの学生は、街で見かける珍しいものに反応し、よく質問を投げかけた。TNIの学生はそれらの質問に一つ一つ丁寧に答えてくれた。また、タイの電車の乗り方、駅の名前、地域の特徴をたくさん教えてくれた。

KUTの学生がタイの食べ物、タイの化粧品を買いたいといった時、どこで売られているのかわからない様子だったが、何軒も店を回ったり、詳しい友達に連絡を取ったり、一生懸命探してくれた。TNIの学生との交流はこの日だけだったが、タイを楽しんでもらいたいという思いや、日本人と仲良くしたいという友好的な対応のおかげで、楽しく過ごすことができた。

【感想】

初めての海外ということで、不安を抱えながら研修に参加した。しかし、親切なタイ人のおかげで、思っていたよりも楽しむことができた。同時に私の英語の発音の未熟さや、リスニングの不慣れさ、語彙の乏しさを痛感した。しかし、私でも学生や店員と何とか会話し、充実した時間を過ごしたように思う。伝えようとする気持ちがあれば、相手もくみ取ってくれるのだ、ということがよく分かった。また、伝える術は言葉だけではないことを学んだ。英語が通じない学生や店員とのコミュニケーションでは、表情や身体を使って伝えることができた。

さらに、文化の違いというものをあらためて理解した。留学生との関わりの中で知識としてあったはずなのに、実際はやっと理解できたと感じた。また、タイの学生とのかかわりの中で、国民性の違いというものを知ることができた。海外に行って自分の国を知る、という経験ができた。タイの人はこういう考え方なのかと理解すると同時に、日本人はこう考える人が多いなと比較して考えるようになった。考え方の違いで怒りたくなることもあったが、認め合うことも大事だと思い、相手のよく話を聞くようにした。そうすることで話し合いが進み、よいことが学べたと感じた。

日本にいただけでは学べないことを、しっかり学べた研修になったと思っている。10日間日本語が通じない世界で過ごしてみて、世界の人々とコミュニケーションをとるためには、まず英語が役に立つと再認識した。また、より興味を持って、外国の文化や歴史を調べようと思った。知っていたとしても、体験するまでは理解できないと分かったが、その知識のおかげで認め合うことができたとも思っている。これからは海外の情報を積極的に集め、異文化をより理解していきたい。

4. 異文化の中で

◇システム工学群1年 川見 稜

3月6日、外気温33度の猛暑の中、私たちはバンコクにある王宮と寺院の見学へと出発した。訪れたのは、翡翠で作られた仏像で有名なエメラルド寺院と、その隣にある王宮、そして涅槃像で有名なワット・ポーだ。

私たちは現地ガイドの方の案内で、まずエメラルド寺院へと向かった。エメラルド寺院は1782年にラーマ1世の指示により建てられた王室専用の寺院である。このため、僧侶が住むことはなく、寺院内で僧侶の姿を見ることはなかった。エメラルド仏は膝幅48センチ、高さ66センチほどのエメラルド色の翡翠で彫られた重要な仏像である。純金で作られたエメラルド仏の衣装は、乾季・雨季・夏、それぞれの季節ごとに衣替えが国王によってなされるという。

私たちが訪れた時のエメラルド仏の衣装は、夏のものだった。たくさんの人々が地面に膝をついて祈りを捧げており、タイの人々の信仰心の厚さを目の当たりにすることができた。また、様々な文化が混在していた時代に建立された象徴として、本殿の向かい側にはスリランカ様式・タイ様式・クメール様式を取り入れた3つの仏塔が建てられていた。どの



図6. TNIでは学生がレーシングカーを制作していた

仏塔も煌びやかで、細かいところまで作り込まれているのだが、日本の寺社仏閣とは色彩や造りが違うせいか、同じ仏教の建物ではないように感じた。

続いて隣接する王宮を訪れた。王宮の正式名称はチャックリー・マハー・プラーサート宮殿といい、ラーマ5世の指示のもと建設が開始され1882年、バンコク王朝が100周年を迎える際に完成した。王宮は、今でも国王が各国大使の信任状を授与する際に接見したり、国賓の訪問の際に公式の宴会が催されたりと、国事行為に使用されている。昔は移動手段として象が用いられていたため、象の小屋が宮殿に併設されていた。

最後に訪れたのはワット・ポーである。涅槃像で有名なこの寺院は、エメラルド寺院や王宮以上に日本人観光客に人気があり、どこを歩いても日本語が聞こえてきた。涅槃像の体長は46メートルもあり、1枚の写真に収めるのは難しかった。足の裏の螺鈿細工は、工事中だったため半分ほどしか見られなかったが、漆黒の上に施された、貝殻から作られた象やお釈迦様は、見る角度で光り方が変わり、とても美しかった。涅槃像の背中側を通る際、108枚のコインをお椀に入れていくと、どんな願いも叶うと看板に書かれていた。思い切って20パーツのお布施を入れたが、効果はあったのだろうか。

【感想】

研修を通して強く感じたのは、英語が満足に話せるようになれば、間違いなく世界に目を向けることができるということだ。さらに、洋画の鑑賞や、少しの勉強で、英語は身近になるということを実感した。

私は昨年の夏、米イリノイ州の英語研修プログラムに参加したが、その時は英語力に自信がなく、自分の意見を言うまでに時間がかかった。その上、意

見が完全に伝わっていなくても、それを指摘する勇気がなく、黙り込んでしまっていた。だが、アメリカの語学研修の後、このままではだめだと思い、英語の授業では、以前とは比べ物にならないぐらい発言をするようになった。

そして今回、タイの学生と交流を深めていく中で、わからないことがあればすぐに英語で質問し、また質問に積極的に答えたりするうちに、成長を感じることができた。印象に残っているのはPBLで的一幕である。私たちのグループは、「独身か結婚か」をテーマに設定してPBLに取り組んでいたのだが、このテーマでははっきりとした答えが出せないことに気付いた。それをタイの学生に伝えたが、彼女たちはインタビューで得たデータそのものが、求めるべき答えだと主張した。

「日本人的な発想では、インタビューで得たデータは、あくまでも答えを得るためのプロセスに過ぎない」ということを、彼女たちに納得させるには時間がかかった。その上、たくさんの例を出しながら説明をしたので、英語を話すってこんなに労力を伴うものだったのか、というぐらい疲れてしまった。

だが、私の意見を私の言葉で相手に伝えられたということは自信につながった。今回の研修で得た自信と、語彙力が足りないという悔しさをバネに努力を続け、大学生活最大の目標である長期留学を自分の手で掴み取りたいと考えている。

◇システム工学群1年 野上 知恵

私たちがエメラルド寺院を訪れた時は天気もよく、青空に金色の寺院と緑色の芝生がよく映えていた。エメラルド寺院は通称であり、正式名称は「ワット・プラシーラッタナサーサダーラーム」である。この寺院の本堂にエメラルド仏（プラ・ケーオとも呼ばれる）が安置されていることから、この通称で呼ばれている。

次に訪れた王宮は、タイ国王の「公的」な居住地であり、国内すべての宮殿の中で最も重要とされている。時代ごとの増築で、現在の形になった。ただし、ラーマ9世以降、国王は居住しておらず、日常的な公務は行われていない。ここでは服装制限がとても厳しく、肌の露出を注意されている観光客もいた。王宮の門の前には制服を着た近衛兵が立っており、私たちの何人かは同じ直立不動の格好をして、写真を撮った。

最後に私たちはワット・ポーを訪れた。ここはバンコクで最も古い寺院である。黄金に輝く全長46メートル、高さ15メートルの涅槃仏が有名だ。仏



図7. 夜はみんなで辛いタイ料理を堪能した

像は全身が金箔で覆われており、目と足の裏には真珠貝の内面が使われていた。涅槃像の大きさには大変驚いた。

どの建物も日本には無い、きらびやかな色調だった。壁や柱などの細部にまで装飾が施されているのも魅力的だった。王宮・寺院のあちこちで綺麗な花が咲いていた。日本の寺院は、木を基調とした色が多く、派手なものは好まない文化であるが、タイの寺院は金を基調としていた。同じ仏教なのにここまで見た目に違いがあることに興味を持った学生も多かったようだ。中には、靴を脱いで入らなければならない建物もあり、日本のお寺と少し似ているなど感じた。

【感想】

研修で印象深かったのは、同世代の賢くて、優しい学生と交流出来たことである。彼らに出会ったお陰で「人生が変わった」と言える。私よりも何倍も上手に英語が話せた上、日本語もできた。タイやシンガポールのトップレベルの大学にいる彼らが輝いて見えた。自分は、もっと賢くなりたいと思った。

正直、今までの自分は好きな事だけをやって、嫌いな勉強はやってなかった。また、親元から離れた解放感から、不規則で時間を無駄にするような生活を送っていた。それがどれだけもったいないことか、やっと理解できるようになった。これからは時間を大切に、自分が興味・関心があることに全力で取り組み、人生を豊かにしたいと思った。

この研修に参加したおかげで、自分が将来どのようなことをやりたいか、少しではあるが明確にすることが出来た。今、すべきことは何なのか、一つ一つ大切に積み重ねていこうと思った。私は今回の研修に、「誰よりもタイ人の子と仲良くなろう」とい

う目標を立てて臨んだが、この目標は達成できたと自負している。

KMITLでの3日目の夜、私は他の日本の学生と離れて、タイの学生2人と中華街を訪れた。3人で遊ぼうと誘ってくれたことが嬉しかった。会話で困ったときに助けを頼める日本人がいなくて戸惑うこともあったが、心に残る思い出になった。これからは、今まで以上に努力して知識を身に付け、またタイ・シンガポールを訪れたい。

私にとって、タイは夢のような国だった。料理は美味しいし、売っているのは可愛いものばかり。なにより、タイ人の笑顔が素敵だった。私も、あんなに人を安心させるような笑顔になりたいと思っている。

◇経済・マネジメント学群1年 田邊 香貴

研修4日目は、KMITLに行く日であり、10時にはチェックアウトを済ませて、出発の準備をしていた。ゆっくり朝食をとる人もいれば、朝早くに朝食を済ませて、ホテル周辺を散策している人もいた。全員の準備が整うと、次のホテルへバスで向かった。みんな疲れからか、寝ている人が多かった。ホテルに到着すると、すぐに荷物を降ろしてKMITLへ向かった。だれもが少し緊張しているように見えた。

KMITLに着くと、学生たちが歓迎してくれた。KUTの学生とKMITLの学生が丸い机を囲んで椅子に座り、自己紹介をした。お互い初対面だったので少し緊張した雰囲気だった。TNIでは、英語だけでなく日本語も話してくれたので、意思疎通がしやすかったが、KMITLでは、完全に英語だけだった。これで英語での研修という実感が湧いてきた。やがて、大学側が昼食の準備をしてくれた。食べているときには、お互いの大学の話や、自由行動では何が見たいかなどを話し、緊張が和らいでいったように感じた。

【感想】

私は、今回の海外研修のおかげで、多くのことを学び、感じ取り、視野が広がった。とりわけ、タイの学生との交流が印象深く、彼らに出会えたことに感謝している。彼らと交流する中で、タイの学生の大きき、親切さ、優しさに感動した。初めて行ったTNIの学生は、私にとって海外でできた初めての友達だ。

海外は初めてだったので、友達をうまく作れるかどうか、不安だった。しかし、バディを中心に笑顔で明るく話しかけてくれ、すぐに仲良くなった。自

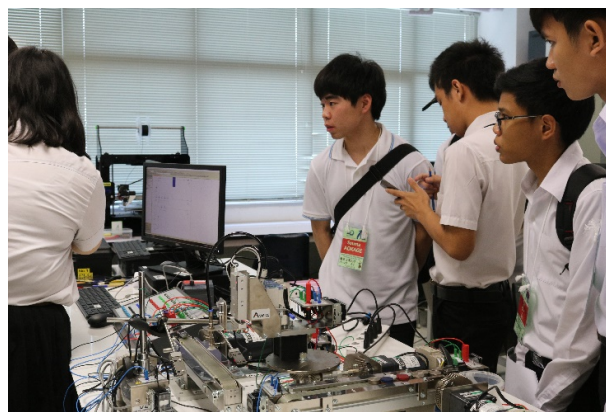


図8. TNIの電子の研究室はKUTと似ていた

由行動では、私たちが食べたいものや、買いたいものを買えるようないろいろな場所を案内してくれた。

驚いたのは、門限に遅れてしまった時、TNIの学生がホテルまでついて来て、一緒に先生に謝ってくれたことである。また、交流はたった1日だったため、私たちの都合を聞いて会いに来てくれ、お薦めの場所を案内してくれた。

KMITLでは、完全に英語だけでの意思疎通だったので、少し戸惑った。だが、バディをはじめ、みんなとすぐに仲良くなった。KMITLの学生は4日間、いろんな場所を案内してくれた。ナイトマーケットでトムヤムクンを食べたり、タイパンツを買ったりして、本当に楽しかった。

PBLでは、グループのみんなでインタビューをしながら、楽しくプレゼンテーションづくりをすることができた。私は、行く前までは英語が嫌になって日本人と居たくなるのだろうと思っていたが、KMITLの学生と話すのは楽しく、英語でも楽しくコミュニケーションをとることができた。

タイ最終日、空港までTNIとKMITLの学生がわざわざ見送りに来てくれた。この時私は、この海外研修に参加できて本当によかったと感じた。なぜなら、寂しさもあったが、タイの学生と出会い、彼らからたくさんのことを学ぶことができたからだ。自分ももっと人として成長しないといけないし、いつか彼らが日本に来た時はもてなしたいと思う。

ところで、タイの寺院を見ていると豪華で派手なものが多く、日本よりも仏教国だと感じた。仏像や建物の美しさに魅了された。写真禁止や靴を脱ぐところもあり、どれだけ仏教を大切にしているか分かった。ワット・ポーでは、寝釈迦仏の大きさに圧倒された。

シンガポールでは、街のデザインや建物の大きさに驚いた。マーライオンやマリーナ・ベイ・サン

ズなど世界的にも有名な観光スポットにも足を運んだ。日本では見られない壮大な景色は、今でも脳裏に残っている。

ビジネスインキュベーターは、環境への配慮や、仕事内容を直接見たことで、将来の参考になった。また、自分たちと同じような年齢の人が社長をしていると聞いて驚いた。アイデアあふれる企業の見学ができたことは、非常に良い経験になった。

海外研修に参加できて本当に良かった。初めて海外に出て、自分の中の世界観が変わり、海外の良さを知ることができた。また海外に出てみると、今の自分の英語力では、意思疎通をはかることが難しいこともわかった。

今回の学びを大切に、これからの生活にも生かし、さらに英語力アップを図れるように頑張りたい。研修でできた仲間とのつながりを大切にしつつ、海外に関心を持ち、これからの自分の進路を考えていきたい。

5. PBLでアイデア伝える

◇経済・マネジメント学群1年 星田 岬

研修4日目は、KUTの学生とKMITLの学生が対面し、オープニングセレモニー、オリエンテーション、PBLグループ分け、日本文化披露を行なった。オープニングセレモニーは、KMITL学生の進行で始まり、KUT学生による日本、高知、KUT、よさこいのプレゼンテーションが行われた。日本文化のプレゼンでは、日本のアニメ、日本料理、建物などについて紹介した。日本のアニメでは、トップバッターの田口くんのトトロと、青景さんのスーパーマリオのコスプレがみんなに受けた。

高知のプレゼンでは、高知のよさこい、料理、自然、お酒などについて紹介し、配った芋ケンピは、美味しいと好評だった。KUTのプレゼンでは、学部や学生生活、国際交流について説明した。

オリエンテーションでは、KMITL生がタイのプロモーション映像、歌と楽器の演奏でもてなしてくれた。また、みんなでハンカチ落とし、ロンドン橋落ちた、というゲームを楽しんだ。ハンカチ落としは、滑る床に転び、笑い合ったことで全員の距離がぐっと縮まった。

PBLのグループ分けでは、KUT生とKMITL生がそれぞれ列を作り、前の人から1~8の番号を振っていき、グループを構成した。みな自己紹介をしたり、夜出かける予定を立てたりして、スムーズにコミュニケーションが取れていた。

日本文化は、けん玉、折り紙、茶道を披露した。



図9. タイ文化を感じたワット・ポーの涅槃仏

けん玉は、KMITL生にとって、少々難しそうだったが、笑顔で楽しんでいた。折り紙には、かなり関心を持っている様子だった。折り鶴、手裏剣、コマなど、私たちが折ったものを見て、「これが作りたい!」と教わりながら折っている様子が見られた。

茶道では、楠瀬さんと此尾さんがお抹茶をふるまった。チャイティーなど、甘いものをよく飲むタイ人だが、なかには、おかわりを貰おうとする学生がいたほど、お抹茶が気に入った様子だった。これは、お互いの文化を身近に感じられる良い機会だった。

【感想】

研修を通じ、海外の学生は積極的で、興味をもって勉強していると感じた。これに比べ、自分は積極性や好奇心、熱意、一人で何かを遂行する力が欠けていると感じた。普段から取り組む前に苦手意識を持ったり、考えてしまったりで、積極的になれないことが多かったせいもあるだろう。

PBLを終えて、上手く英語で伝えられないにしても、気持ちさえあれば伝わると、前向きに考えられるようになった。研修前に抱いていた、「これから先、自分が求められることとは一体何だろう」という疑問に対し、自分なりの答えが見つかったように思う。

将来どんな仕事をしたいかまだ明確ではないが、仕事で海外にいる可能性もあるし、国内にいるかもしれない。どこにいたとしても、きっとグローバル化は今よりずっと進んでいる。海外では、いろいろな国籍の人が共存している。そういった状況を目にしたことで、英語はコミュニケーションをとるためのツールであり、言葉が分からないままではいけない、伝える手段として言語は大きな役割を担ってい

る、と再認識した。

つまり、求められるのは積極性である。先川先生が「質問しないのは、聞いてないのと同じ」と言ったことを思い出す。海外では積極性があるのはごく自然なことだ。KUTの講義でも、積極的な人ほど理解が深く、質問をしている。

この研修には、ギリギリまで迷って応募した。行けることになったその時、今までの自分から大きな一歩を踏み出せたように感じた。これからは、研修で得たことを胸に刻み、考えるよりもまず行動！くらいの勢いで、何事にも積極的に挑戦していきたい。

◇システム工学群1年 入江 康平

研修4日目の正午ごろ、KMITLに到着した。セレモニーの会場では日本人学生とタイ人学生が、それぞれ3〜4名ずつで丸テーブルに着いた。オープニングセレモニーは、タイ人学生2人による司会で進化した。初めにKUT教授、KMITL教授による挨拶があり、ウェルカムランチを楽しんだ。昼食では、国境を越えて人気のある韓国のアイドルグループや、人気アニメの話で盛り上がった。今回、訪問した日本人の中に、アニメの主人公と似たような名前をもつ人がおり、タイ人が名前を覚えることに夢中になっていた。覚えたかと思うとまた間違えるので、みんなで笑い合った。

その後、KUT学生による高知、KUT、日本のプレゼンテーション、よさこいのパフォーマンス、日本文化（伝統的な遊び、茶道等）体験があった。日本文化体験では、万華鏡、けん玉、鳴子、折り紙を披露した。コーヒータ임では、折り鶴を一生懸命に覚えようとするタイ人もいた。高知のプレゼンテーションでは、みんなに芋けんぴを配った。KUTのプレゼンテーションでは、タイ語で挨拶をした。続くよさこいの華麗なダンスは、もちろん大変好評だった。その後、タイ人学生によるパフォーマンスがあり、日本人、タイ人合同でタイの遊びを体験した。この時のグループが、キャンパスツアーとPBLのグループとなった。初対面でありながら、数時間一緒に過ごただけでこんなにも仲良くなれることに感動した。

【感想】

KMITLを訪問した際、タイ人の学生の優しさと、フライトシミュレーターがあることに感銘を受けた。タイ人はいつも笑顔で、常に私たちのことを気にかけてくれていた。移動中、荷物をたくさん持っ



図 10. PBL ではみんなでアイデアを出し合った

ているときに、「荷物を持ってあげようか」ではなく、「荷物持つよ」という言い方に気配りを感じた。

タイの文化が影響していると思われるが、自分さえ良ければいいということではなく、周りの人の幸福が、自分の幸福のような考え方があるのではないかと思った。どうして日本にいと、すべての人に同じように気配りをするのが難しいのだろう。

自由行動のときは、私たちがいかに楽しめるかということを第一に考えてくれていた。お薦めの料理を教えてくれ、買いたいもの（探し物）はないか、と気軽に声をかけてくれた。また、自分たちの友達をたくさん紹介してくれ、繋がりが広まった。

今回の研修は、今までの海外訪問で一番楽しかった。それは、微笑みの国・タイで育った人々との食事や自由行動を共にできたことが、楽しさを倍増させてくれたからだろう。本当に、タイ人には言葉で表せないくらい感謝である。今後も最高の友人関係を続けていきたいと思っている。ただ、時間については少し日本人と違い、緩い感覚を持っているが、それは問題ではないだろう。

さて、フライトシミュレーターの会場に着くと、すぐに教官が「やってみたい人」と声をかけたので、私が真っ先に挙手した。これは貴重な体験となった。ドンムアン空港周辺のフライトと、羽田空港の離陸を体験させていただいた。実際の訓練に使用される約数億円の機械を操縦した体験は、素晴らしいものだった。実際のセスナの操縦桿の重さになるので、緊張感をもって操縦できた。教官とはフライト中、往路の機材（東京・羽田～バンコク・スワンナプームに乗った飛行機）について英語で話し、会話を楽しむことができた。実際の航空路図も見せてもらった。これは、人生で貴重な1ページとなった。

研修では、英語の学習意欲がさらに高まったこと、新たな知識、見識が増えたことが大きな収穫だった。

この研修で4大学を訪問し、学んだことは今後の学習に繋げていこうと思った。素晴らしい機会を与えてくださった本学と、引率をしていただいた先生や事務局の2人に心から感謝したい。

◇経済・マネジメント学群1年 八木原 綾音

研修4日目。不安と期待の中で、4日間にわたるPBLが始まった。初日はKMITLでウェルカムランチがあり、時間が経つにつれ、おたがいに打ち解けていった。KMITLの学生たちは、ギターやタイの楽器を使って歌を披露してくれた。アイスブレイキングでは、2つのゲームを行い、楽しむことができた。オリエンテーションやグループ分けの後、ナイトマーケットに連れて行ってくれた。彼らは「この料理美味しいよ」「これ食べたことある？」と様々な食べ物や料理を薦めてくれた。私たちは、食べたことのない料理に興味津々だった。ホテルまで送ってくれた後も、何気ない会話をしながら親睦を深めた。

2日目から、本格的にPBLが始まった。それぞれのグループが、試行錯誤しながらテーマを決め、問題解決のための新しいアイデアを考えた。すんなりと決まるグループもあれば、なかなか決まらず、苦戦するグループもあった。

昼食は、KMITL生が学内のカフェテリアに連れて行ってくれた。KMITLはキャンパスが広く、カフェテリアがいくつもあるという。カフェテリアは、KUTと同じように、店員に料理を注文して作ってもらう形式だった。

KUTと異なっていた部分は、屋台のように料理のジャンル別で分けられていたことだ。タイ料理はもちろん、ドリンクやスイーツなど幅広くあった。KMITL生は、私たちが気になった料理を、どんな味なのか、どのくらい辛いのか、丁寧に説明してくれた。ランチの後は、図書館を案内してくれた。学生数が多いせいか、図書館はとても広かった。

ただ、本の数は建物の大きさに比べ、少ないように感じた。KMITL生は、「学生が勉強するためのスペースは、24時間空いている」と教えてくれた。これは、KUTと同じである。逆に、異なっていたのはセキュリティの部分である。KUTでは、警備室横のドアに学生証をかざして図書館本館に入る。

KMITLでは、駅の改札のような機械がそれぞれの階にあり、学生証をかざして入った。機械のそばには、監視員のような人が、1人1人をきちんと見ていた。私たちが通ろうとした際も、一度止められた。しかし、KMITL生が熱心に説明してくれ、通



図 11. PBL の成果を緊張しながら英語で発表

ることができた。図書館から戻ると、それぞれの学生は気持ちを切り替えてPBLに集中していた。夕食は、学内のマーケットを案内してくれた。食べ物や料理だけでなく、衣服やアクセサリなどが豊富に揃っていて楽しめた。

3日目は中間発表だった。午前11時から、それぞれのグループが発表することになっていた。中間発表に向け、みんな準備を進めていた。発表では、きちんとまとめられているグループもあれば、そうでないグループもあった。中間発表を終えた後は、カフェテリアで昼食をとり、PBLの総まとめに入った。それぞれのグループが、明日の発表本番に備え真剣だった。

迎えた最終日。会場は緊張感が張り詰めていた。くじ引きで順番を決め、午前に3グループ、午後に5グループが発表した。すべての発表の後、グループの順位が発表され、1~3位が表彰された。また、生徒全員に証書が授与された。

最後の夜は、電車に乗ってナイトマーケットに行くグループと、トゥクトゥクに乗るグループに分かれて行動した。大半がトゥクトゥクのグループに行ったが、トゥクトゥクは危ないと聞いていたため、私たちは乗りたくても勇気が出なかった。KMITL生は、「一緒に乗るから大丈夫だよ」と、最後まで私たちのことを考えてくれていた。みんな門限ぎりぎりまで一緒にいたのは、口には出さずとも、別れが近づいていることを察していたからだろう。

翌日、空港で荷物を預けるために待機していると、思いがけず何人かのKMITL生、TNI生が見送りに来てくれた。昨日が最後だと思っていた私たちは大喜びし、写真を撮り合い、ぎりぎりまで別れを惜しんだ。

【感想】

今回の研修で、私は初めてタイを訪問した。ずっと行きたいと思っていただけに嬉しかった。TNIでバディになった3人は非常に優秀で、日本語が流暢だった。話題に困ったりはしなかったが、英語を使っているの会話が出来なかったのが残念だった。移動の時も、買い物している時も、ずっと話しかけてくれ、会話が途切れることはなかった。

日本のことが本当に好きなんだなあ、と感じるほど様々なことを聞いてくれた。自由行動の後、門限に間に合いそうにないと気付いた TNI の学生たちは、心配してホテルの中まで来てくれた。その上、先生に謝ると言って、先生が来るまでホテルから帰ろうとしなかった。タイ人の優しさをあらためて感じた。

また、私たちのバディは KMITL での交流の最中でも会おうと提案してくれた。車でわざわざ迎えに来てくれ、帰りはホテルまで送ってくれた。ナイトマーケットではお揃いのブレスレットを買い、そのブレスレットに「TNI KUT」と彫ってもらった。これは最高の思い出になった。今でもそのブレスレットは、自分の家のアクセサリボックスに大切に保管している。

KMITL 生も、優しくしてくれて嬉しかった。毎日ナイトマーケットを案内してくれ、ホテルに着いた後もすぐには帰らず、会話をしてくれた。つきっきりでお世話をしてくれ、その上、お土産をたくさんもらった。本当にタイ人は優しいと心から思った。最終日には、メッセージカードを全員に渡していた。空港にも見送りに来てくれた。

シンガポールでは、自由時間に様々な場所を訪問した。観光名所はもちろん、何気ない壁の落書きや、お店の看板までもが日本とは違うように思えた。私は、シンガポールで腹痛に悩まされ、帰国した後も数日治らなかったが、それもまたいい経験だった。

今回の研修で様々なことを経験し、自分の英語力不足を思い知った。学群が違う人とも交流ができてよかったと感じた。今後、英語力の改善のために文法を見直し、ボキャブラリーを増やし、留学生とも交流して英語力を高めていこうと思った。

研修が実り多いものになったのは、本学の関係者はもちろん、現地で学生の話をしてくださった方々、そして何より、自分の成長を見守ってくれている両親のおかげだ。多くの人たちの協力があって研修は成功したと思う。そのことを忘れず、TNI や KMITL の学生とまた会える日まで、努力を欠かさずに頑張っていきたい。



図 12. PBL ではサプライズの誕生ケーキも登場した

◇システム工学群2年 青景 壮真

KMITL の学生と KUT の学生が、8 グループで 4 日間に渡る PBL を行い、その成果を 10 日、ホテルの会議室で発表した。午前中は、発表に向けて最終調整を行った。選んだテーマは「独身か結婚か」、「より運動をするために」、「自殺問題の解決に向けて」、「タイでの料理屋ログのアプリを作る」、「ごみの分別について」、「大気汚染について」、「ペットボトル再利用の提案」、「固体のごみの処理について」の 8 種であった。先生方と各グループ 1 枚の評価シートから、プレゼンを相互評価した。発表会の最後に KMITL と KUT の学生に対し、PBL を終了した証書が授与された。

今回の発表で、1 位は自殺問題を取り上げたグループであった。発表会では、すべてのグループがパワーポイントを用いて資料を作成した。このグループは、現在のタイと日本の自殺問題についてデータを用いてプレゼンを行うとともに、いじめの現場を寸劇で紹介した。その上で、最終的にいじめられている人が自由にしゃべることができるアプリケーションの作成を提案した。

2 位のグループは、タイの料理が海外から来た人に対し、すぐにわかるようなアプリケーションの開発を提案した。このグループは実際にどのようなレイアウトで料理を紹介したら良いか、図を作りプレゼンを行った。3 位のグループは、現在使い捨てのペットボトルに日本や欧米のビンの再利用技術を導入し、そのためのペットボトルの形状、デポジット制度などの包括的な提案を行った。

すべてのグループの発表の後に質疑応答の時間が設けられ、両校の学生が質問や感想を英語で述べた。その際に KMITL と KUT の着眼点の違いを感じ取ることができた。面白いことに、KUT の学生は、詳細な内容について、KMITL の学生は、全体的な

内容について質問していた。

【感想】

今回初めて海外へ行き、今まで学習してきた英語が、実際にどの程度通用するのか不安に思っていた。ある程度会話は成り立っていたが、語彙が足りず、細かいニュアンスを伝えきることができなかった。きれいな発音も心掛ける必要があると感じた。

人によっては、聞き取りやすい英語と、聞き取りにくい英語があったが、聞き取りにくい英語をしゃべる人の方が多かった。しかし、タイの学生と英語という共通言語を使って会話できたことは、魔法のようだった。

一方、バンコクは確かに経済発展しているが、細い裏道に入ると、まだ発展途上であることが垣間見えた。また、タイ人は日本人より家族や友達を大切にしている印象を受けた。それは、彼らとの会話や、携帯の待ち受け画面から分かった。

タイの学生とお店をまわっていたとき、タイの学生の母親の誕生日だということで、みんなで一緒にプレゼントを考えた。誕生日の学生に対しては、ケーキを用意してサプライズ・パーティーを企画した。それは、仏教への熱い信仰があるからだという話を学生から聞いた。人を大切にする気持ちは日本人より強く、幸福度や心の豊かさという点で、私たちも努力していく必要があると感じた。

TNIとKMITLでは、タイの学生一人一人が明確な目標を持ち、それを実現するために学部生からアクションを起こしていることがわかった。この答えはPBLで見つけることができた。

私たちはPBLで「ペットボトルの再利用」を取り上げ、どのようなシステムやデザインにしたら導入しやすいか、議論をした。タイの学生は自分のアイデアについて、「なぜならば」と論理的に説明をして売り込むことができたのに対し、日本人学生は、自分の意見を述べるのが、やや苦手だと感じた。

こうした中で、日本人学生にも良いところを見つけた。再利用しやすいペットボトルのデザインでは、ユーザーが使いやすい形状を考えるような細かい配慮が得意だった。日本人の学生が、世界で競争していくには、配慮をしつつ、より自分をアピールすることや、相手を納得させる力をつけていけばよいと感じた。

一方、シンガポールの南洋理工大学は、大きなキャンパスと、学生一人一人に学習部屋があるのが印象的だった。学生たちはキャンパスでお気に入りの場所を見つけ、自由な雰囲気の中で勉強してい



図 13. A*STAR では井上室長から科学者の心得を学んだ

た。このように、研修では文化や人々の考え方の違いを体感でき、日本人の長所、短所を見つけることができた。自分としては留学を目指すために、まずは十分な英語力を養うことだと思っている。

◇環境理工学群 1 年 岡林 弘務

初めての英語によるプレゼンテーションは、TNIで行った。KUTの学生は、日本、高知、KUT、日本文化の4種類のプレゼンテーションを用意していた。私たちのグループは、高知の歴史や自然美、食文化について発表した。その最中に高知の特産品の芋けんぴを配ると、非常に喜ばれた。

後で知ったのだが、タイではポテトチップスではなく、バナナチップスが主流なようだ。タイの学生は「芋けんぴはバナナチップスに似ている」と、語っていた。気になってそれを食べてみると、本当に似ていておいしかった。

常夏の気候に慣れたタイの学生にとって、日本の四季の移り変わりは珍しいようだった。またタイでは、河川は茶色に濁っているものだと思われるようだが、「仁淀ブルー」と呼ばれる仁淀川の清流の写真を見せると、みな驚いていた。

一方、KMITLでのプレゼンは、少し緊張していた。プレゼンを行う私たちを、携帯で録画する学生もいた。日本の大学では、例えば講義で携帯を使用することに良いイメージを持ってないが、タイの学生はかなり自由だった。SNSが全盛という時代の流れもあるのだろう。

南洋理工大学 (NTU) でのプレゼンは、シンガポール人学生のリクエストにより、英語ではなく、急遽日本語で行った。私たちは、メモや原稿を英語で用意していたため、和訳しながら行った。NTUの学生のプレゼンも日本語だった。Japanese Appreciation

Club（日本愛好会）のメンバー全員が日本のファンで、日本の景勝地や観光名所を訪れた時のことを、流暢な日本語で説明してくれた。

英語、中国語、マレー語以外の別の言語を使いこなすことは、ここでは当たり前らしい。私もいずれは英語以外の外国語を学び、さらに視野を広げようにしたいと思った。この後、美術館のような流線形の建築学科の建物などを訪問した。

【感想】

10日間を通して感じたことは、日本人学生とアジア圏の学生との違いだった。出会ってすぐの会話からそう考えていた。タイの国民性が影響していると思われるが、優しく温厚な人たちばかりだった。コーヒーを飲みに行こうとすると、学生から砂糖がいるかどうか聞かれ、わざわざ自分の作業を止めてコーヒーを淹れに行ってくれた。高知だと、そこまでしてくれる人はなかなかいないだろう。そういった違いを感じた。

PBLの時にも違いを感じた。グループができて、いざ何をするのか決めるところまではスムーズにいったが、内容を考えるとき、思った以上にリラックスしていた印象があった。とりあえず校内のカフェで内容について決めることにした。たわいもない会話をしたり、食べ物を食べたりして、日本ではあり得ないリラックスマードの中で、内容構成を考えた。

最初は私も驚いて、焦る気持ちでいっぱいだったが、思った以上に良い意見が出てスムーズに進行した。最終的には、私たちのグループは「自殺」という重く困難な課題解決に取り組むことにした。解決方法とともに具体例を提示し、分かりやすい発表を行うことにした。その結果、1位の最優秀グループに選ばれた。このように、タイ人学生は学習に対する意識や姿勢に至るまで、私たちとは異なり、オン・オフの切り替えが上手だった。この経験をこれからの学生生活に活かしていきたいと思った。

◇環境理工学群1年 鎌倉 康哉

研修9日目は、シンガポールのバイオポリスにあるA*STAR研究所を訪れ、アナンド先生と井上雅文先生の講義を受けた。ホテルを午前8時20分に出発し、地下鉄で約1時間かけて移動した。アナンド先生は約1時間、シンガポールの経済発展の仕組みや、国策として行う研究について解説してくれた。

A*STAR 研究所では、科学技術の発展による経済成長や、生活水準の向上を目標に、5200人のスタッフ



図 14. KMITL のフライトシミュレーターに感動

が働いているという。その中には科学者や技術者、技術的なサポートスタッフも含まれる。出身国も様々で、その数は64カ国にもなる。

研究機関としては、生物医学研究、科学・技術系の研究、またその商業化に関する機関、そして奨学生としてA*STARを卒業させるアカデミーを持っていた。いずれも世界最先端の研究から商業化まで行うので多くの特許主が存在し、経済も潤うといった仕組みができあがっていた。このようにシンガポールは国の面積が小さい分、主要機関が狭いエリアに集中し、運営を行うことができていた。

講義後、多くのKUT生が質問をした。その一つが、「シンガポールの仕組みを日本に取り入れることは可能か」というものだ。結論から言うと「できない」ということだった。

要因の一つは言語の問題だ。日本では英語を話せる人が少なく、多国籍の人と意見を交換し合うのは難しい。またシンガポールに比べ、国土も広く人口が多いため、国の機関を集中させるのは困難である。したがって、日本は独自の方法で世界に遅れをとらない仕組みを作り上げることが課題だ。そのためには、英語はもちろんのこと、深い専門知識を身につけることが重要だと感じた。

【感想】

私は、今回の研修が初めての外国だった。以前から外国に興味があり、外国に友達を作って日本ではできないことを体験する、というのが一番の目的だった。タイではまずTNIに行き、現地の学生と交流した。最初は少し緊張していたが、TNIの学生は親しみやすく友好的で、すぐに打ち解けた。夜はタ

クシーで、バンコクの街を案内してくれた。彼らとは後日、みんなより一回だけ多く交流することができた。その時はナイトマーケットに行き、多くのタイ料理を食べた。帰りは日本人学生だけでタクシーに乗り、ホテルに戻った。

KMITL でも学生はみんな親切だった。私も慣れてきたので、すぐに仲良くなった。KMITL では、自分から英語で話しかけることを意識した。おかげでPBLの話し合いでは、多くの意見交換ができた。タイや日本の問題、その解決に向けた仕組みをみんなでも考えた。発表では、私が質問に答えるなど積極的に英語を使った。

シンガポールのA*STAR研究所では、アナンド教授と、ウイルス研究者の井上雅文・分子診断室長の講義を受けた。教授の講義は難しかったが、あらためてシンガポールの国のシステムのすごさを感じた。井上室長からは、日本の英語教育の在り方や、日本人とシンガポールの人の性格や考え方の違いを学んだ。

これからの日本が、よりグローバルに、アジアのリーダーとして活躍するためには、多くの日本人が英語を普通に話せるようになることや、広い視点を持つことが大切なことだと感じた。南洋理工大学では、多くの学生の学ぶことに対する意識が高く、とても良い刺激になった。

今回、タイ・シンガポール研修に参加して、良い経験できたし、大勢の友達もできた。また、今まで以上に海外に対する興味が広がり、多くの人と出会い、視野を広げたいと感じた。そのために、これからもっと英語の勉強に力をいれ、スムーズに自分の考えを伝えられるようにしたいと思った。

◇情報学群4年 井上 舜也

研修7日目、シンガポールのバイオポリスのA*STARで、私たちは井上雅文・分子診断室長による講義を受けた。講義は約60分程度で、内容は大きく2つに分かれた。また講義後に私たちと井上先生は、浅井孝則氏のセミナーを聴きながらランチタイムを過ごした。

講義前半は、「日本人学生にやって欲しいこと」についてだった。内容は、井上先生がA*STARで勤務することになった経緯から始まった。井上先生が高知出身であることや、学生時代は化学以外の成績が芳しくなかったことなどの生い立ち話を聞いた。KUTの学生が講義の雰囲気になじめ始めた頃、シンガポールに関する知識や労働環境についての内容をお話ししていただいた。



図 15. 南洋理工大学ではアニメをコスプレで紹介した

その後、シンガポール国家科学技術開発5カ年計画についての話、井上先生が影響を受けた小松岳志さんについての話と続いた。シンガポールでは日本の5倍から10倍に相当する潤沢な研究費が与えられることや、積極的な外国人労働者の受け入れ、雇用形態がアジア的であることなど、将来海外で働きたいと考える学生にとって興味深い話であった。

感染症については、マラリア、結核および結核菌、インフルエンザ、SFTSについてお話していただいた。専門的な内容だったが、過去の事例や歴史、対策法などの内容は、私たちにも理解しやすい内容であった。質問もたくさんあり、感染症に対する見方が大きく変わった。

ランチタイムは高知県シンガポール事務所の浅井副所長による「グローバリゼーション」に関するセミナーがあった。KUTの学生からは、グローバリゼーションについて「異文化を取り入れること」、「異国の人と触れ合うこと」などの意見がでた。浅井さんは学生の意見を受け、高知県の農家の方々が生産している梅干しがシンガポールに進出した具体例を挙げ、グローバリゼーションとローカルを組み合わせた「グローカリゼーション」が、とても価値があることだと解説してくれた。私たちも大学生活において、部活動やサークルなどを通じ、グローカリゼーションに貢献したいと思った。

【感想】

研修全体を通し、私はタイやシンガポールで出会った人々に大きく影響を受けた。この研修の良い点は、多くの人との繋がりを得ることができたことである。これは個人的な旅行では難しいだろう。初めての海外渡航だったが、自身の英語力や研修のリーダーという立場、また研修以外の生活でも、大学院

受験や卒業論文など、多くの不安やプレッシャーを感じていた。

研修前は、全てが中途半端になるのではないかと、この先、後悔するのではないかと考えていた。しかし研修後は、語学力の向上をはじめとした多くの目標ができ、研修前に感じていた不安やプレッシャーが、些細なことであることに気付いた。つまり、研修が私の心境に大きな影響を与えたことは間違いない。中でも、研修先で出会った人々から得たものは、大きかった。

特に、私たちに対するタイの学生の気遣い、シンガポールで働く人々の仕事を楽しむ余裕を知ることができたのは、一番の収穫だ。彼らの生活や人間性を目の当たりにし、彼らや彼女らの長所を自分も取り入れたいと感じた。

KMITL では4日間 PBL を行なったが、日本で経験した PBL とは、目的が同じでもプロセスが異なる点が多かった。日本での PBL も良い経験だったが、KMITL で経験した PBL の方が、開放的で楽しく感じた。たったこれだけの経験だが、現在はものごとを楽観的に見ることができるようになった。またタイの学生に会いたい、メトロポリスに行きたいと感じている。この思いは、英語を学ぶための明確なモチベーションとなった。

6. 英語で広がる世界

◇情報学群1年 小松 眞子

研修10日目の午後は、南洋理工大学と Business Incubator をグループごとに訪問した。バイオポリスから MRT という地下鉄で移動し、MRT の駅から南洋理工大学までは、バスに乗った。2階建てのバスで、2階席からの景色を楽しんでいる学生もいた。大学に到着してからは、大きなスクリーンが3つもあるホールに案内された。そこで、Japanese Appreciation Club（日本愛好会）というサークルに所属している南洋理工大学の学生が待っていた。

まず、南洋理工大学の学生のプレゼンテーションを聞いた。プレゼンは全て日本語で行われた。日本愛好会サークルは1996年に発足したサークルだ。1年を通して、新入生歓迎会、日本人学生との交流活動、新入生合宿、クリスマスパーティー、日本文化祭、打ち上げを行っている。毎年5月には選ばれた学生が、日本を訪れ、日本文化や日本語を学んでいるという。

次に、私たちも日本語でプレゼンをした。その後は、よさこいを披露した。南洋理工大学の学生たちには、私たちが着ていたコスプレの衣装や、よさ



図 16. Business Incubator では脳波でゲームを体験

こいの衣装と鳴子といった、日本文化を体験してもらった。一緒に写真を撮って盛り上がり、とても喜んでもらった。

続いて、日本語で自己紹介をした。それぞれ学んでいる分野の発表や、将来の仕事について話した。キャンパスツアーでは、同大学のオリジナルグッズを売っているショップに案内された。そこでは各学部のTシャツや文房具、マグネットなどが売られていた。この後、ハチの巣をモチーフにして作られた建物を見学した。有名な建造物だそう。中も見ることがない形で、多くの学生が写真を撮っていた。

巨大なモニター画面が設置された場所もあり、サッカーの試合が放映されていた。その後、訪れた図書館はとても広く、セミナー室などの設備が整っていた。利用者の数や、蔵書がとても多かった。段ボールでできた椅子といったユニークなものもあった。大ホールでは、翌日に南洋理工大学の理事長が特別講義を行う予定で、その準備が進んでいた。ホールは2階建てで、とても広かった。

食堂や寮を通して建築学科のキャンパスへ向かった。寮もキャンパスも建物がとても芸術的で美しかった。寮は部屋数が多く、建物ごとにそれぞれ色やデザインが違い、部屋の扉に学生の個性が出ていた。建築学科の建物だけでなく、南洋理工大学のいろんな場所に、変わったデザインの椅子や、緑の自然が取り入れられていた。

食べ物や飲み物は、学内に大きなスーパーやドーナツ屋さんがあって、充実していた。私たちの何人かは、お薦めのタピオカジュースを飲んだ。帰りは同大学から地下鉄の駅まで、無料のシャトルバスに乗った。一人の南洋理工大学の学生が駅まで送ってくれ、その後彼の案内で、バクテーと一緒に食べに行った。

【感想】

今回の研修を通して、英語の大切さをあらためて感じた。私は日本だけでなく、世界に目を向けていこうと思った。タイに到着して驚いたのは気温だった。暑いと覚悟して行ったが、実際に体感すると、日本からかなり離れたところに来たことを実感した。

TNI の学生は、ほとんど全員が同級生で、話すのが楽しかった。私のバディは同じ分野を学んでいる学生で、C 言語といった共通の話題で盛り上がった。また、TNI の学生は日本語がとても上手で驚いた。数人の学生は、実際に日本を訪れたことがあった。

その学生たちの言葉で、心に残っていることがある。日本では歩いている人に英語で道を聞いても、ほとんどの場合、通じなくて困ったという。これは、日本の英語教育を考えさせられる話だった。実際、タイでは道でお土産を売っている人に英語が通じた。そのおかげで、ホテルにたどり着くことができた。TNI のあるバンコクは大都市で、いろいろなお店やビルがあり、東京を歩いているような気分だった。

KMITL での PBL は、最初は不安でいっぱいだった。1 日目の交流はとても楽しかったが実際に PBL が始まってみると、KMIT の学生も私たちもどうしていいかわからない状況で、思うように進まなかった。それでも KMITL の学生は、自分の下手な英語を一生懸命理解してくれようとしてくれた。話し合いは終始和やかな雰囲気、落ち着いて取り組めた。

夜は、いろいろなところに連れて行ってくれた。楽しかったのは、ナイトマーケットである。お土産を買いすぎた、と思うくらい買った。タイのナイトマーケットは、お店の数が多く、食べ物や服、お土産だけでなく、散髪屋があった。

食べ物の中で、気に入ったのは、カオマンガイという鶏肉料理である。私は辛い食べ物が苦手なので、タイの食べ物が口に合うか不安だった。しかし、タイの学生は、辛くないものが食べたいというと、調べてくれ、おいしい料理を教えてくれた。タイ人は日本人より優しく、おいしい食べ物がたくさん食べられた。

シンガポールは、バンコク以上に発展している印象だった。ほとんどの建物が近未来的で、綺麗な街並みだった。特に感動したのは、マーライオンである。夜は、マーライオンにプロジェクションマッピングが行われていたので、2 倍楽しめた。

南洋理工大学は、建物の美しさと設備の豪華さが



図 17. ユニークなハニカム構造の南洋理工大学のビル

印象に残った。おしゃれなインテリアや、学生が勉強しやすい理想的な環境が整っていた。同大学の日本愛好会の学生は日本語がとても上手で、中には 6 カ国語を話せる学生がいた。シンガポールでは多くの人が英語と母国語の 2 つを話せるという。それを聞いて、私も第 2 言語を学ぶことを検討すべきだと感じた。

シンガポールで気に入った食事は、バクテーである。シンガポール料理というより中華系の料理で、とても美味しかった。南洋理工大学の学生が、中国語で注文してくれた。また同大学からは、地下鉄の駅まで無料のバスが何本も出ていた。KUT も、もう少しバスの本数を増やしてくれると助かるのだが。

自由行動では、セントーサ島へ向かった。携帯が使えない中で、たどり着けるか心配だったが、事前の計画や、道を聞いたりして楽しく散策することができた。また、A*STAR での井上先生の講義のおかげで、TOEIC の勉強への意欲が湧いた。ほかの研修にも参加し、これからも英語力の向上を目指したいと思う。

◇システム工学群 3 年 上村 大輔

研修 9 日目の午後、Tenopy 社の CEO である Chong Kian Soh 氏の案内で、Business Incubator の JTC LAUNCH PAD を見学した。最初に訪れたのは WELCOME CENTER だ。ここは主に Meeting room として使われており、色々なタイプの会議室があった。ドアがほとんどなく、壁に「クレイジーは最高だ」などの文字が貼られていた。

次に訪れた One-North は、企業が軒を並べた集合アパートのような建物だった。各アパートには別々の色が塗られ、異なるジャンルの会社が入っていた。屋台が立ち並ぶエリアも存在し、バスケットコート

までであった。途中、スコールが降ったが、屋根のある通路がアパートの間にあり、濡れることはなかった。

ここでは、2つの会社を見学した。Chong 氏が経営する Tenopy 社は、Web 関係の会社であり、元々3人で始めたという。今は社員が12人になり、ここに移転した。壁にはクライアントの声がかかれていた付箋が張り付けられ、クリスマスモチーフにした飾りつけがあった。ここに勤める日本人からは、シンガポールで働く利点を知ることができた。

次に Neeuro 社を訪れた。この会社では、脳波を測定するヘッドバンドを頭に装着し、ゲームで子どもの能力を計測したり、適切なトレーニングを提供したりするという技術を開発していた。私も実際に脳波計測を体験することができた。

【感想】

今回のタイ・シンガポール海外研修で、最も印象に残ったのはタイの学生との交流だった。彼らはとても優しく、「食べたいものは何か」「お土産として買いたいものは何」と色々訪ねてきて、私が言ったことをどうにかして叶えてあげようと、配慮してくれた。おかげでタイで食べたかったもの、欲しかったものを買うことができた。

タイの学生たちで最も仲良くなったのは、TNI の3年生のフォド君である。ただ、TNI は1日だけで、文化交流、プレゼンテーションであまり交流する機会がないと考え、お土産を持っていかなかった。

ところが、予想は大きく外れた。フォド君は日本好きで、日本語を少し話することができた。おかげで他の学生ともスムーズに話せるようになった。晩にはバスや電車を乗り継いで、日本人の口に合うタイ料理の店に連れて行ってくれた。そこで食べたガイヤーンがおいしく、忘れられない味になった。

私は、フォド君含め TNI の学生にお土産をあげられなかったことを後悔した。どうにかしてあげる機会はないものか、帰ったら学校に送ろうかとも考えたが、3日目の夜、彼がホテルまで来てくれたので、ようやく日本のお菓子を手渡すことができた。中は団子で10種類味のレパートリーがあった。これは何味だと興味を持ってもらったのがよかった。その日は、ホテルのロビーで明かりが消えるまで話をした。フォド君とは今でも LINE でやり取りをしている。今度何か送ってくれるというので、とても楽しみだ。



図 18. 芸術的なデザインの南洋理工大学の建築学科

7. 多民族と多様性

◇経済・マネジメント学群1年 中村 優

研修最終日は、2〜3人のグループごとにシンガポールでの自由行動を楽しんだ。滞在先のホテルから目的地までは、公共交通機関やタクシーを利用して移動した。今回の研修で初めて外国を訪れた学生もあり、自由行動は電車に乗るにしても、観光地でチケットや食べ物を購入するにしても、英語がなかなか伝わらず、道に迷ったりした。

ただ、その度に現地の人々が身振り手振りで教えてくれた。おかげで私たち言語や文化が異なる中でも人の優しさを感じ、自分の英語レベルの不足を再認識し、経済活動やものの考え方などグローバルゼーションについても、深く考えるようになった。

シンガポールには、セントーサ島やガーデンズ・バイ・ザ・ベイなど、たくさんの観光名所があった。チャイナタウンやアラブ・ストリート、リトル・インディアなど、民族の文化が色濃く表れている地域があり、多民族国家シンガポールを肌で感じる事ができた。

【感想】

私は、今回の研修で初めて日本とは言語も文化も異なる国を訪れた。最初は不安だったが、本場のタイ料理やタイボクシング、また多民族国家であるシンガポールでは、多様な文化を目の当たりにした。このため、帰国してからは世界各国の様々な民族や文化、歴史について、深く学びたいと思うようになった。また、異文化体験で多くのことを学び、自分の将来に対する意識が変わった。

タイで現地の学生と過ごした日々は、有意義なものだった。彼らの人格のすばらしさや教養の高さ、また PBL で感じた高い能力には、驚かされた。同時に自分の英語力や経済や経営、専門知識がどれだけ低いかを思い知った。私にとってショックだった

けれど、「今の自分のままではいけない」と、強く思うようになった。

一方、シンガポールの Business Incubator では、Tenopy 社の CEO である Chong Kian Soh 氏から、「20 代前半でも、大学に通いながら会社を起業する人は多い」と伺った。同じ年代の若者が、大学に行っただけ学ぶのではなく、なぜ学ぶのか、学んだ後どうするのかを常に考え、自分のアイデアを大切にしている行動に移していることは、衝撃だった。

これからの自分の大学生活では、ただ学ぶのではなく、それをどう活かすかを考え、積極的に行動していくことが大切だと思った。さらに広い視野を持つためにも、ボランティア活動であったり、異文化体験であったり、意味のある活動を通して、多様な価値や異なる考えを持つ人たちと交流していきたいと思った。

◇経済・マネジメント学群 1 年 楠瀬 青衣

研修最終日は、各々が計画を立て、シンガポールの名所を歩いた。午前 9 時頃にホテルを出発し、最寄りのブギス駅から地下鉄でガーデン・バイ・ザ・ベイに向かった。ベイフロント駅に着くと、ガーデン・バイ・ザ・ベイまでの地下の道のりの両側に植物の写真が一面に張られていた。地上に出ると、右側にはガーデン・バイ・ザ・ベイの有名なスーパーツリー・ブローグを見ることができた。左を振り返るとマリーナ・ベイ・サンズが高々とそびえ建っていて感動した。

この後、マーライオンを見に行くため、30 分ほど歩いた。気温が高く、到着後は椅子に腰かけて休憩した。マーライオンの前で記念撮影をした後、再び徒歩で巨大なショッピングモールの中にある、ファウンテン・オブ・ウェルスという噴水を見に行った。近くに寄ると、水滴がかかってくるほどの迫力だった。

昼食はマックスウェル・フードセンターの中にある天天海南鶏飯という店で、チキンライスを食べた。ここは有名店で、行列ができていたが、すぐに座ることができた。その後は味香園甜品というかき氷など売っている店に入った。この店も繁盛しており、大勢の人がデザートを食べていた。

最後はリトル・インディアにあるインド系のスーパーマーケット、ムスタファ・センターに立ち寄った。店内は広く、端から端まで歩くのに 20 分ほどかかった。ピザや総菜などが売られており、ガーリックや香辛料の香りが店内に漂っていた。

【感想】

シンガポールは、たくさんのビルが建ち並び、東京のような雰囲気があった。その一方で、ビル一つ一つのデザインがお洒落だった。日本のように無機質なビルが建ち並んでいる風景よりも、それぞれの外見が個性的な方が、歩いていて楽しかった。

ガーデン・バイ・ザ・ベイでは、人工の木でありながら、神秘的で力強いデザインに圧倒された。ただ木の下で眺めているだけで心が落ち着いていた。園内には人通りの少ない場所があり、ベンチに横になると都会の中とは思えないほど気持ちの良い風が吹いていた。

マックスウェル・フードセンターで食べたチキンライスは、とにかく鶏が柔らかく、あっという間に食べてしまった。友人の 1 人は S サイズを注文し、もう 1 人の友人と私は M サイズを注文したが、どちらも同じ大きさだった。しかし、口に入れてみると S サイズの鶏の部位は骨が多く、食べづらそうだった。昼食後に食べたかき氷は、たくさんの種類があった。店員は 50 代より上の女性で、内装も落ち着いていた。

最後に訪れたムスタファ・センターは、食品から電化製品まで、なんでもそろっているスーパーマーケットだった。穀物の種類だけでも数え切れないほどだ。日本ではあまり見かけない、ドリアンなども売っていた。氷の上に並べられた魚は、日本では見たことのないほど種類が豊富だった。また、ファンデーションなどの化粧品も数がそろっており、さすが多国籍の人種が集まるシンガポールならではのと思った。

◇システム工学群 1 年 田口 陽太

研修最終日は、各班に分かれ自由行動をした。田口、井上、上村、青景の 4 人で午前 8 時に朝食をとった後、速やかに空港に移動が出来るよう荷物をまとめた。午前 9 時にホテルを出発し、マリーナ・ベイ・サンズに移動した。シンガポールは 719.2km²と、東京 23 区と同じくらいの広さである。時間を考慮して地下鉄を利用した。マリーナ・ベイ・サンズでは、屋上の展望台に向かった。展望台は 56 階にあり、高さは地上 200m。屋上からは辺りの光景が一望出来、シンガポールの高層ビル群や植物園として有名なガーデンズ・バイ・ザ・ベイ、マーライオンなどに足を運んだ。

この後、食品売り場で土産を購入し、フードコートに移動して休憩をとった。午後 1 時にマリーナ・ベイ・サンズを出発し、ガーデンズ・バイ・サンズに

移動した。入り口では、植物のスケールの大きさに圧倒された。シンガポールは赤道の137km北に位置する南国で、日本と異なる植生が興味深かった。さらに足を進め、ガーデنز・バイ・サンズの代名詞でもあるスーパーツリーに到着した。スーパーツリーは木の形を模した人工物の周りに植物を巻いたものだ。人工物である利点を活かし、配色を赤紫にすることで、巻かれた植物の緑色との見事なコントラストを創りあげていた。料金を払ってスーパーツリーに登り、ベイ・サンズを眺めた。

この後、マーライオンを見るため対岸まで歩いた。マーライオンはシンガポールに複数あった。その日の午後は曇天であり、降り注ぐ太陽の光が海を幻想的な色に変えていた。セントーサ島では、別の大きなマーライオンも見た。

【感想】

シンガポールは中国、マレー、英語圏と、多くの人種が混在している。いわば人種のミックスボウルである。英語は公用語であり、中華料理店で注文をした際も中国人の店員は、英語で話していた。なるほど、英語は「学ぶためのツール」ではなく、「会話するためのツール」だとあらためて感じた。

私は、タイの学生やキャビンアテンダントと会話をした際に、相手の英語がとても早く、また特有の訛りがあったため、うまくコミュニケーションをとることが出来なかった。自分の英語の能力に嫌気がさすこともあったが、通じたときは嬉しかった。また、英語を聞き取る能力や、どういった順序で話し始めればよいか、少しコツがわかってきた気がした。

というのも、シンガポールでは、英語による会話の8割以上が理解出来たからだ。シンガポールは厳しいルールが多いため、英語で事前に確認する場面が何度かあった。こうして自分の英語が「使える」と実感出来た時は嬉しく、英語をもっと学びたいと思うようになった。しかし、自分の考えを主張するには程遠いため、努力をもっと重ねていかなければならないと思っている。

8. おわりに

研修は、参加学生が無事に帰国して終わりではない。全学生を対象にした「報告会」に備え、事後研修が4回以上あった。英語によるプレゼンテーションで、自分たちの体験や感想を他の学生に伝えることは大切なことだ。嬉しいことに、学生たちのコミュニケーション能力、英語力は年々レベルアップしており、単なる異文化体験から、PBLのように専

門的な分野にまで踏み込むようになった。

「報告会」は4月16日に香美キャンパス、同17日に永国寺キャンパスでそれぞれ開かれた。香美キャンパスには150人以上の学生たちが集まり、参加学生の体験談に熱心に耳を傾けた。学生たちは、一歩踏み出せば新たな地平が見えることや、英語を学べば、それだけ世界が広がる—ということをかなり理解したのではないだろうか。

今回の研修では、次のステップとして留学や海外インターンシップを真剣に考えている学生が増えたと実感している。今年度は、8月末から新たにバンクーバーでの体験型の英語プログラムを始めるが、より多くの若者が自己の可能性を伸ばし、グローバル人材に成長することを期待したい。ノーベル賞作家・大江健三郎の本のタイトルにあるように、「見るまえに跳べ」と、学生たちに語りかけている。

The Results of the KUT Globalization Program from the Thailand & Singapore Study Tour

Shinichiro Sakikawa*

(Received: May 7th, 2018)

International Relations Center, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

* E-mail: sakikawa-shinichiro@kochi-tech.ac.jp

Abstract: KUT conducted a study tour in Thailand & Singapore in the 2017 fiscal year from March 4th to the 14th. Twenty KUT undergraduate students, from the School of Systems Engineering, the School of Environmental Science and Engineering, the School of Information, and the School of Economics and Management participated. The director of the International Relations Center, Professor Shinichiro Sakikawa and two administrative staff officers accompanied the students for support. As a part of the KUT Globalization Strategy, we visited the Thai-Nichi Institute of Technology (TNI), the King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang (KMITL), the Agency for Science, Technology and Research (A*STAR), the Business Incubator, and the Nanyang Technological University (NTU). During the study tour, the KUT students interacted with the foreign students discovering the academic and research levels at TNI, KMITL, A*STAR, and NTU. The Thai and Japanese students spoke in English, studied about their different cultures, and deepened their friendships. In particular, the PBL (Project Based Learning) held at KMITL was the highlight of the study tour. We believe that this was a precious opportunity for Japanese students to grasp the impact of globalization, to feel the energy of raising Asian power, and the importance of communication skills in becoming global individuals.